～～隠れたコ～～

一、バレーボール部

土曜の放課後、鬼瓦高原公園の片隅でシャトルが飛び交っていた。
瞬間速度にすれば大半のスポーツを凌駕する応酬。相手の動作とラケット、フォームのクセを読んで先回りすることで打ち合う。さらにフェイントで裏をかき、かかれ、草原にダイブする。
「ぐはぁ！！」
今日何度目かのダイブは大げさになりつつあった。
高杉徹は数センチ先に落下したシャトルをラケットで手繰り寄せる。
「徹、だらしないわねー」
息を荒げながら萩千夏は得意顔。というのも、対戦相手は後輩の篠原智樹と、彼女だから。チビとはいえ男子は男子。徹がプレー最中に倒れてしまうのは不甲斐なかった。
「うるせー！　風下なんだからしょうがねーだろ」
彼の言い分ももっともだ。風下に立つ彼の打つシャトルは勢いを殺されてふにゃふにゃで打ちやすいモノ。対する千夏のそれは勢いが伸びる。
さらにお互いの立ち位置にも不平がある。なだらかな坂の上と下。背丈こそ同じだけれどそのせいで差があった。
「ふふーん、言い訳？　なさけないわねぇ！　あんたバトミントン倶楽部なんでしょ？　それでこのざま～？」
あからさまな挑発に徹はむっとする。彼女も運動神経が良く、もし同じ条件ならもっと良い勝負ができたろうと思い、そこも惜しかった。
「バトミントンは室内競技なんだからこんな場所でできるかっつーの」
「あら、室内だったら自分が勝てるとでも言いたいわけ？」
「そうとは言わないけどよ、明らかに不利だろ。千夏こそこっちに来るか？」
「それは遠慮する」
彼女も地の利を理解しており、そこはごまかしていた。
「そうっす。そのタイミングっす！」
少し離れたところでは後輩の篠原智樹と今野真奈がラリーをしている。あちらは試合形式ではなく智樹が真奈に教える形でのんびりとしたものだった。
「よいしょっと！　どう？」
「はい、上手です！　今野先輩はバトミントン上手っすね！」
褒め殺しな気もしないでもない智樹と照れながらも笑顔の真奈。さわやかで楽しそうな雰囲気に気持ちがもやもやする。
最近、雰囲気が暗くなっていた真奈に笑顔が戻ってきたのは安心材料。その一方で、そ

れをもたらしたのは智樹であること。それがもやもやの原因かもしれないと思うと、徹は自分が嫉妬めいた気持ちを抱くのだと自己嫌悪してしまう。
「ん～……」
結果的に良いのであれば素直に喜ぶべきなのにそれができない。そのしっくりこなさがあった。
「どうしたの？　徹。お腹でも痛い？」
「ちげーよ」
「あ、わかった。真奈が後輩の子と仲良くして嫉妬してるんでしょ」
「誰が！」
「徹が～」
「嫉妬なんかしねーよ！　ったく、二人ともただバトミントンしてるだけだろ」
「そうかしら？　さっきからすっごく楽しそうだけど？　ね、もしかしてあの後輩の子って真奈のこと好きなんじゃないの？」
「は？　そんなことねーだろ。智樹はチビだし、真奈とは釣り合わねーよ」
「ふーん、チビだと釣り合わないんだ～」
「な、なんだよ……、俺は一般論でだな」
「ふーん、一般論ね～……」
やけに食いついてくる千夏に徹はたじろぎ始める。何か彼女の癇に障るようなことを口にしたか思い出そうにも心当たりがない。横目でじろりと含み笑いを浮かべる彼女に圧され気味……。
「先輩、休憩っすか？　じゃあ僕らも一旦休みましょうよ。今野先輩、僕、スポーツドリンクありますから！」
「ありがと。でも私も持ってきてあるから平気」
「ねえ真奈。徹が言ったんだけどね？　チビとのっぽな子は釣り合わないんだって」
「え！」
「え……！？」
「え、ええと、そうなんだ、徹」
千夏の一言に徹と智樹はどきりと声を漏らす。
まさかそのまま真奈に伝えるとは思っておらず、何かおひれにはひれを付けるという予想がしっかり打ち砕かれる。
誇張された内容なら千夏のせいにできるが、そのまま伝えられては言い逃れを改めて考える必要がある。何か誤魔化す言葉は無いかと考えるものの、一方でどうして誤魔化す必要があるのかと困惑してしまう。
「ぼ、僕はそう思いません。ね、ねえ、今野先輩……」
智樹も緊張で上ずった声を出しながら真奈を見る。
「ん？　ええと、そうね。私だって徹みたいなチビじゃ嫌かな。うん、釣り合わないし」

「ふーん……、そうなんだ……　」
少し前から何かと徹の周りに影を見せる千夏。彼女は真奈に対して挑む様な態度を取ることが多く、また同じような挑発だろうと真奈は軽く受け流そうとしていた。
「じゃあ、徹と真奈はそういう関係じゃないんだ～　」
「……！　」
「な、別に俺はだな……、真奈がおっちょこちょいだから心配なことがあって、別にそんなつもりじゃないし　」
「誰がおっちょこちょいよ！　私こそ徹がチビ過ぎて頼りないからお目付け役をしてあげてるんでしょうが　」
「誰も頼んでない！　」
「こっちだって！　」
売り言葉に買い言葉、二人ともムキになって唾を飛ばし合う。
「ふふ、仲が良いのねぇ……　」
「なにが！　こんなのただの腐れ縁だろ　」
「ふんだ！　こっちこそ願い下げよ！　」
「そうなんだ……。じゃあ、徹はいない方がいいよね？　ねえ、徹、さっきの勝負、体育館で続きしようよ　」
「え？　なんでそうなるんだよ。それに体育館はバレー部が使うんだろ？　」
「今日は男子バレーだし、隅っこ使うぐらい平気よ。あ、それとも言い訳できない場所で負けるのが怖いとか？　うふふ、いいよ。徹、逃がしてあげる　」
「なんだと！　あのなあ、バレーだったらまだしも、バドミントンじゃ負けねーっての。いいか、俺はだな……　」
「はいはい……。じゃあ、勝負ってことでいいかしら？　」
「望むところだ！　」
これまた安直な挑発にも関わらず、煽られるとすぐ熱くなる徹。二つ返事で頷いていた。
「智樹、と言うわけだから今から学校行くぞ　」
「どうして？　さっき二人とも言ってたじゃない？　腐れ縁～だの、願い下げ～ってさ。それともあれ嘘？　本当は二人一緒が良いのかしら？　」
交互に二人を眺める千夏。怒りの矛先こそ千夏に向いていた徹だが、改めて吐いた唾を飲み込むことはしたくない。今更ながら千夏の段取りに舌を巻く思いだった。
「私は……　」
「先輩、もう少し相手いいっすか？　」
そんな二人を見て智樹は真奈の手を取り引っ張る。彼女も発言の撤回がやりづらいらしく、智樹の強引な態度に流される。
「勝手にしろ　」
ムカッとした徹は声を荒げてラケットを手にズンズン歩く。

「あん、待ってよ、徹……待ってってば～」
弾むような声で追いかけるのは何も千夏だけではない……。

＊＊

「待ってよ、徹。もう、なに怒ってるの？」
「怒ってなんてねーよ。俺はただ、その……」
怒っている。それは自覚している。では、その原因は？
バドミントンの練習を智樹としていた。それなのに智樹は自分より真奈と練習をする。その裏切りが一つ。
真奈の方からバドミントンの練習を見学したいと言ってきた。それなのについてこない。それが裏切り二。
最近、妙に考え込むことが多いのに、それを話してくれない。それが裏切り三。
それが気になるし、歯がゆい。真奈の力になってきたと自負しているけれど、今は？
「徹さぁ、やっぱり真奈が気になるんでしょ？」
「ならねーよ。別に、あいつは智樹と一緒に練習してんだし、問題なんか……」
「あの後輩の子、真奈のこと好きだよ」
「え……」
早歩きの足が止まり、千夏に振り返る。彼女はようやく立ち止まってくれたこと、そしてあからさまな興味を引けたことに挑発的な笑顔を返す。
「またその話かよ。女ってほんとそういう話好きだよな。だいたいにしてそんなこと、あるわけねーだろ。智樹があんな……あんなデカ女……」
「智樹君ってスケベだよね。真奈のおっぱい、なにかっていうと見てたし」
控えめな胸の前で弧を描くように手を動かす。真奈のおっきなおっぱいのジェスチャーのつもりだろう。そして目を丸くしてしゃがむ仕草。今度はきっと智樹のマネ。
「そんなこと！」
「ほんとだよ。さっきだって練習のはずが真奈とべったり。変じゃない？　練習するなら徹としないと」
「それは千夏が居るから……」
「嘘。それなら智樹、あたしと練習しようとした？」
「それは……」
ただの一度も提案していない。一応の理由としては真奈の方が見知っていることと、千夏とは付き合いがほぼないので話しにくいから……。
本当にそれだけだろうか？
真奈は背が高いけれど運動が得意ではない。一方で千夏は小柄ながら普段からバレー部などで運動しているのでバドミントンもそれなりにこなす。練習相手なら真奈よりも千夏

の方が良い。
やはり千夏の言うとおり、智樹は真奈に興味があるのだろうか？　そうだとして、自分は何を……。
「おーい、どこいくのー？　」
「え？　あ……　」
考え込んでいたせいか校門を素通りしていたことに気付く。慌てて引き返すと千夏にくすっと笑われた。

＊＊

体育館へ向かうと中からはたまにボールの弾む音が響いてきた。これが女子の練習なら掛け声など響くのだが、人数も少なく実力も乏しい男子バレー部だとそうもいかない。
三組の高尾春樹が必死になって人数を集めているようだが、男子のほとんどは花形の野球やサッカーに行く。
残り物の男子にまともな戦力、運動神経を求められるはずもなく、練習の集まりも悪かった。
「おら、もっとやる気だせよ！　ちゃんとレシーブしろ　」
入口から春樹の荒ぶる声が聞こえると同時にボールが転がって来る。徹はそれを足で受けて拾った。
「おい、高杉、ボールを足で使うんじゃねー。サッカー部じゃねーんだぞ　」
「わりいわりい。すまん　」
その通りだと思いボールを軽く拭いて籠の方に居た笠原雄太に放る。運動が不得手な彼はあわわしながら籠に戻していた。
「高杉、お前もバレー部に入るのか？　チビはお断りなんだが、どうしてもってんなら考えてやらんでもないぞ　」
「なに言ってるのよ。人が少なくて誰でもウェルカムのクセにさ。それより今日も人足りないんじゃないの？　バレーは最低でも６人必要って知らないの？　あんたこそ徹に頭下げて入ってもらいなさいよ　」
揶揄されたことにむっとする徹を差し置いて千夏が口を挟む。人数、成果共に裏打ちのある女子バレー部の彼女が言うと春樹も負い目からか悔しそうに口をへに結ぶ。
「くそ、言いたい放題言いやがって……。で、何しに来たんだ。参加か？　」
多少の期待が浮かぶ春樹を見ると悪口言われたことも忘れて少し気の毒になる。
「悪いんだが、コート半分貸してくれってことで……。その、今日だけでいいんだよ。こいつとバドミントンで勝負つけたいんだ　」
「バドミントンだ～？　ふざけんな。そんなのは女子供のやることだろ。外で勝手にやってろ。今は男子バレー部が練習してるんだ！　せっかく借りれるってのに！　」

普段のうっぷんとクラブすら組織されていないバドミントンの私的な勝負の為にコートを使わせろという傲慢な態度。気の長いわけでもない春樹は真っ赤になって叫んでいた。
「そんな怒るなよ……。悪かったよ。千夏、帰ろうぜ 」
あまりの剣幕と同情の気持ちで平謝りする徹。これ以上練習の邪魔をするのも悪いので千夏の手を取り帰ろうとする。
「なによ。いいじゃない。半分は練習に使ってないんだし貸してくれたってさ！ 」
「今は俺達男子バレー部が練習してるんだ！ 部外者は黙ってろ！ 」
食い下がる千夏に春樹は取り付く島もない。
「千夏、行こうぜ。高尾、悪かったよ。バレー頑張れよ 」
二人がヒートアップするのを見て逆に冷静になってしまう徹。それでもなおムキになる千夏。
「試合は外でやろうぜ。校庭なら公園より平坦だからさ……。ほら 」
彼女の手を強く掴んで引っ張る。これまた彼女を怒らせないかと思うも、これ以上熱くなられるのも困りもの。背丈は若干千夏が高いが男子だけあってか彼女も振りほどけそうにない。徹は無理やり彼女を引っ張り出ようとした……。
「もう、しょうがないわね…… 」
頬を掻きながら千夏は手を握り返してくれる。心なしか指が絡み合いくすぐったい気がするが、今は気にしていられない。とにかく出る必要があるから。
「待て 」
出ようとした二人を呼び止める春樹は目を細くしてじろりと二人の間を睨む。苦々し気に唇を噛み、先ほどとは違って青くすら見える。
「なんだよ。練習の邪魔したのは悪かったよ。出ていくからそれでいいだろ 」
「ふん、気が変わった。お前ら俺らと勝負しろよ。お前らが勝ったら貸してやる。負けたら俺の練習の邪魔したんだから埋め合わせしてもらう。どうだ？ 」
「いや、貸してもらわなくていいよ。行こうぜ、千夏 」
これ以上話を複雑にするのも困るので千夏の手を引く。彼女も同じ気持ちなのだろうか？ 表情は少し緩んでいて喧嘩腰にも見えない。
「待て！ お前、ふざけんなよ。ここまで言われて悔しくないのか？ 」
「俺は別に…… 」
「男だろ！ 勝負しろよ 」
「じゃあ、バドミントンで 」
「ふざけんな！ バレーボールだろ！ この流れなんだから！ 」
「いやいや、俺、バレーボール素人だし 」
「とにかく！ 勝負しろよ！ 」
急に矛先を徹に向けた春樹はダダをこね地団駄を踏む。
ようやく千夏の気を逸らせたというのにこうしてまた蒸し返されると面倒くさい予想が

できる。
「ふーん、じゃあこうしようか。徹、あんた勝負受けてあげなさいよ。あたし達が勝ったらコートを貸してもらう。負けたら徹はバレー部の雑用に使っていいわ」
「おいおいおい、俺のメリットねーじゃねーか……」
「いいでしょ、男が細かいことぐちぐち言わないの。どう、高尾」
「お前らが負けたら言うこと聞けよ」
「ええ」
「そんな理不尽な……」
やる気満々な徹に二人は項垂れながらも上靴に履き替えた……。

＊＊

徹と千夏のチビ二人のコンビ。
対するは高身長を買われて入部した高尾春樹と、姉がOGの坂田広樹。春樹に無理やり連れて来られた渡辺智文。鍵っ子で暇を持て余していた笠原雄太。野球部なのだが言いくるめられてついてきた加賀和彦。スポーツのデッサンをしたいという理由で見学していたマンガクラブの笠原実の六人。
まともにスポーツができるのは広樹と春樹、和彦ぐらいだ。
変則的な二対六の勝負の為、徹達は特別ルールとして二回連続でボールに触ってよいとなった。それでも広いコートを走り回るのは厳しいと思えた……。
「いくぞ！」
和彦がサーブをする。千夏目掛けて……。
彼は野球こそホームランバッターだ。四番、五番で活躍するけれど普段はのんびりした素直な性格。ややノロマな雰囲気もあるけれど気が優しくて頼まれごとを快く引き受けてくれるタイプ。それが高じて二組のクラス委員まで押し付けられてしまったが、当人は役に立っているのならと不服を言わない。今日も人数合わせで練習に参加していた。
「任せて！」
緩やかな放物線を描くサーブを千夏は難なく受け、そのまま徹にトス。
「いけ！」
徹はせこいと思いつつ雄太と実の方を狙う。運動の不得意な雄太は足がついて行かず、見ることに躍起になっている実は顔でボールを受けてしまう。
「あらら……」
無残に零れるボールに徹は罪悪感すら抱いてしまう。
「ナイススパイク！」
対し千夏は笑顔でハイタッチを求めて来る。
「くそー！　おい、お前ら真面目にやれよ！」

「だって、ぶつかったら……」
気弱な雄太はおそるおそる口を挟むと、春樹の怒声はさらに勢いを増す。
「その為の声かけだろうが！　もっと声出せ！」
「そうか。なるほど、声かけにはそんな意味があったんだね！　よーし、やるぞー。さっこーい！！」
すると実が見当違いなやる気を垣間見せる。
三組、漫画クラブの変な子で通っている笠原実は色白チビのもやしっ子。けれど好奇心旺盛で漫画にできるネタを探しては体当たりの取材を繰り返す。
勉強も運動もダメだけれどとにかく絵に起こして皆に披露する。体育祭や地域の祭りでは必ず彼の描いた絵が飾られる程であり、文系の中でも一目置かれる子だった。
「実、それは野球だぞ」
そんな彼に和彦のずれた指摘が飛んでくる。
「野球なの？　どこでも聞くからスポーツ共通なんだと思ってた」
「ちげーよ。それに他にも応援の歌があるんだぞ」
「それってどんなの？　教えてよ」
「んとな、おーまえーが男なら、ここでいっぱつかっとばすぞ～って……感じで歌って応援するんだ」
スポーツ漫画を描く参考にしたいらしく、うんうんと頷く実に和彦は得意になって応援歌を口ずさむ。
「お前ら真面目にやれ！　今はバレーだろうが！」
それは当然春樹の怒りに触れてしまう。当然足並みは空回りでそろわない。いくら二対六であっても穴だらけ。連携も取れない情況では押される一方。むしろ足を引っ張り合ってしまう。
対し特別ルールで千夏が二回連続でボールを制御してしまえばほぼ無双状態。時折フェイントに徹が混ざるだけでかく乱ができた。
「ふふーん、どう？　あたし達のコンビネーションに勝てると思う？」
「ふーん、バレーボールってけっこう楽しいな。俺も背が高けりゃやってたかもな」
千夏のフォローもあってか活躍の機会もめぐってくるためか気分が良い。
「じゃあ、徹もバレーする？　そうねえ、女子バレーの雑用から始めてもいいわよ」
「それは遠慮する」
「いいじゃん。手伝ってよ。今度試合あるし、荷物運びとノートつけるの。お願い」
ポンと手を合わせて素直にお願いされると無下に断るのも気が退ける。バドミントンで一応練習相手をしてもらっていることもあり、多少は彼女の我儘を聞くのも頷ける部分があった。
それに素直にお願いされると悪い気がしない。こうして素直な態度を見せてくれたら仲良くやれそうなのに……。

「しゃーねーな……。その代り、たまにコート貸してくれよ」
「うん。みんなと相談するよ。じゃあ、早いところあいつらやっつけて、試合の続きしよっか」
「ああ、そうすっか」
ボールを受け、軽く上げる。サーブのやり方は審判が居ない時だけグーで殴っても良いと教えてもらった。狙うは実か雄太か？　広樹や春樹は狙わない。勝負は非情なのだから……。

＊＊

「……負けた……」
とんとんっと転がるボールを見てコートに這いつくばる春樹。負けた理由は雄太と実にあるのだろう。雄太は既に怒られるだろうとびくついているが、実は気にせずデッサンを始めだす。
「いえーい！　あたし達のかちー！！」
「いぇーい！」
一方徹と千夏は笑顔でハイタッチ……から彼女は抱き着いてくるくる回る。
「お、おい……なんだよ……。そんなはしゃぐなよ……」
想定外の行為に徹は困惑気味で受け止める。
汗ばんだ二人。湿っぽく、肌が触れると熱く感じる。
「離れろって……」
悔しがるバレー部の面々の視線を感じて徹は剥そうとする。けれど肌が汗で滑り、逆に抱き合う格好になる。
「あ……」
「きゃ……」
互いに滑ってそのまま支え合い人という字を作る。
「……」
柔らかい感触。女子だけに筋肉の固さは薄いせいだろう。そして鼻にかかる酸味がかった匂い。甘みが含まれて、挑発的で臭いはずなのに妙に後をひくモノ……。
「おい……」
「なによ、徹が抱き着いてきたんでしょ？　このスケベ……」
「誰が……。とにかく……」
「もう、汗でべとつくんだから離れなさいよ……んっ……」
いい加減押しのけようとすると手を取られ、手のひらに柔らかいモノが触れる。中央には多少の固さがあり気になる。同時に股間が苦しくなる。前と同じ。女の子のおっぱいを触ってしまったのだ。

「あ、ごめん……ごめん……」
「えっち……スケベだね、徹……どさくさに紛れて……」
「そんなつもりじゃ……」
じっと睨む千夏。事故と思いたいが、彼女の視線は真剣そのもの。これは泣かれないだろうけれど怒られるパターン。いつ落ちるかわからない雷に視線を泳がせる。
「じゃあ、罰として今度女子バレー部の練習手伝いなさいよね。いい？　木曜の午後、体育館だからね」
「な……そんな……」
「いいの？　真奈に言うよ？　徹ってばアタシの胸触ったってさ……」
「何が胸だよ……洗濯板のクセに……」
「何か言った？」
「いえ……なんでも……」
断りづらい状況に陥り徹はドツボにはまったと落胆してしまう。同時になれないバレーボールの疲労からかコートに這いつくばってしまう。
「ふふ、徹ったらだらしない」
「俺は瞬発力の人なの」
「うふふ……」
「ったく……」
とはいえ持久力を付けるべきと自省もする。
「……？」
やけに静かな春樹が気になる。彼の性格から考えると今頃雄太や実に文句の一つも言うだろうに未だ項垂れている。
視線を向けるとその表情は怒りも薄く、たまににやけている気もする。悔しさと呆れで笑いがこみあげているのかもしれない。そう思った。
「さ、高尾、これで文句ないでしょ？　コート借りるからね」
「ああ……勝手にしろよ……。ただし」
「ただし？」
「また勝負しろよ。次こそ勝つ」
「ふーん。ま、いいけどね。何回やっても負ける気ないし？」
「おいおい、その辺にしとけよ……」
そう言いつつもこのメンツなら負ける気がしない。一方で春樹もそれはわかっているはず。なので不自然に思えた。彼の提案もにやけた締まりのない顔も……。

＊＊

翌週木曜日、徹は智樹に用事があるので公園での練習は無しと伝えた。彼はさも残念がり、来週か土曜日は必ずと約束させられた。

そんなに練習がしたかったのかと思うと千夏に安直な約束をしたことを後悔する。もし来週も手伝えと言われた時はしっかり断ると決め、放課後の体育館へと向かった。

体育館へ行くと既にウォーミングアップが始まっていた。入口に見えた彼に菅井麻帆が気付き、ぱたぱたと走ってきた。

「あれ、徹君。どうしたの？　今、体育館は女子バレーの練習中だけど……」

「千夏と約束して雑用を手伝いに来たんだ」

「そうなんだ。もう、千夏ちゃんたら強引なんだから……。大丈夫よ。女子バレーは人多いし、徹君がそんなことしなくても」

麻帆は千夏が我儘を言ったのだろうと察し、代わりに謝ってくれる。彼女は性格も大人しく優しいから気疲れしない相手。こういう時も状況を察して労いの言葉を選んでくれる子だった。

「いいよ。約束だし。それより何をすればいいんだ？　なんか雑用なんてあるのか？」

「おーい、麻帆ちーん！　早く早く～」

するとペアでトスし合って居た澪が手を振っていた。チビだけれど瞬発力には自信あり、運動神経抜群の彼女は周りを抑えてレギュラーだった。

「ごめーん。じゃあ、徹君は隣のコートを立てていて」

「お、わかったよ」

さすがに見学だけする気にはなれず、ネットの支柱を倉庫から運んで立てる。一人でもつにはずしっと重い。それを女子に遠巻きにして反対側のコートに立て、ネットを張る。軽い運動程度で設置もすぐ終わり、すぐまた手持無沙汰。結局見学していた。

鬼瓦校の女子バレー部はそこそこ強く、サッカー、野球と並んで力が入っている。

同学年の女子バレーは複数いて、レギュラー争いも熱が入っている。

チビの遠藤澪、引っ込み思案の菅井麻帆、おおざっぱな石渡直美と神経質な長峰理恵。練習よりもおしゃべりに夢中な井上美優とそれに付き合わされる菱沼佳代。人当たりの良い荻原翼。探してみるとこんな感じ。

その中で目をひくのがリーダーシップを取りたがる高坂瞳と長峰理恵。二人とも何かと指摘し合い、まるで口論寸前になる。

「おいおい、大丈夫かよ」

瞳は母がPTA役員ということもあって教師に対して強気に出ることが多い。なぜ母親が偉いと校内でも偉いのかよくわからないが、精神的支柱があることが彼女の強気の根拠な

のだろう。
対する理恵は普段の様子を見る限り御崎澄子ほどではないがお淑やかな女の子。そんな彼女がバレーボールとはいえ校外の運動クラブに参加しているのが意外だった。そして彼女が瞳とバレーボールを出しに言い合いをしていることも……。
女子同士だとそういう別の、むしろ本当の顔が出てくるのかもしれないと思いながら二人を眺めていた。
「なーににやにやしてるのよ、いやらしい…… 」
ようやく来た千夏は彼の視線の先に瞳と理恵が居たことに気付いてちくりと一言。
「徹ってむっつりスケベだね。なに？ あんた理恵が好きなの？ それとも瞳？ ……正直、どっちも止めといた方がいいよ 」
からかう態度から、一瞬考え込んで素で忠告する千夏。やはり女子同士だと男子に見せない一面というのを知る機会も多いのだろう。
「はは……、そうだな。それより俺は何を手伝えばいいんだ？ さっき麻帆に頼まれてネット立てておいたけど、他に…… 」
「あ、そうなんだ。ありがと。今みんなウォーミングアップしてるから、それおわったらスパイクの練習するのよ。徹がそれを補佐してくれると他の子も練習に専念できるわ 」
「テレビとかで見たな。こうやってトス上げるんだろ？ あれ？ お、難しいな 」
徹は手近に転がって来たボールで軽くトスを上げるが、ボールは思ったように上がらない。
「そうじゃないよ。こうやって……。手はこう…… 」
千夏の言うとおりに構えてふっと上げる。すると正面に上がった。
「ほう、こうやるのか…… 」
「うまいうまい。さすが徹。チビのクセに運動神経だけはあるわね 」
「チビは余計だっての 」
「そうだーそうだー！ 」
同じくチビの澪がブーイング。背丈なら千夏もそう変わらず、お前が言うなと口をとがらせる。
「はいはい、わかったから……。それじゃ今日はスパイクのローテーションね。行くよー 」
「おー 」
千夏の号令に女子バレー部の面々はコートに並んだ……。

スパイクの練習の後は紅白に別れて試合形式の練習をしていた。
実力派の女子バレー部だけあって動きもきびきびしており、練習にも声が掛けられ、熱意が見えた。

徹もバドミントンが盛んならもっと練習のしがいもあるのにと羨ましく眺めていた。
「……あら？　徹じゃない。何してるの？　ここは女子バレー部の練習場所のはずだけど……。ああ、わかった。あんた覗き見してるんでしょ？　女子の体操着姿見たいのね。イヤラシイ。ホントあなたってむっつりスケベね 」
練習も始まってしばらくしたという頃、体操着姿の綾子がやって来る。彼女は徹を見るなり反論する暇も与えず捲し立てる。
「な、ちげーよ。誰がそんなこと。俺は千夏に頼まれて…… 」
「どうだか？　どうせ今日のオナニーのオカズを物色するために理由付けて来たんでしょ？ 」
「おかず？　オナニー……？ 」
今一つピンとしない言葉に首を傾げる徹。それを演技と思った綾子は意味ありげに微笑み、靴を直す。
お尻を向けて軽く体をよじる。彼の眼前では丸みを帯びたお尻が弧を描く。運動前で汗の匂いはせず、代わりに柑橘系の香りがした。
都会育ちの彼女は運動前に清涼スプレーを使うためだろう。甘い香りが気になって徹は彼女の方を向いていた。
普段なら短パンを穿く綾子だけれど今日はブルマ姿。身体のラインにぴったりくっつき、お尻の割れ目を見せつける。
それがどうしたと思うもなぜか視線が丸みを追ってしまう。彼女がお尻を震わせれば目もそれに従って動き、ちらりと見えたグレーの布にドキッとする。
同時に股間が熱く隆起するのがわかる。前に三軒寺で千夏や麻帆たちと一緒に居た時のことを思いださせるものだった。
「…… 」
「ふふ…… 」
ちらりと視線を向ける綾子はお尻を目で追う徹を嗤っていた。
「やっぱり見てる。徹ってスケベだね 」
「な……誰が…… 」
「だってさ、徹のオチンチン、勃起してるじゃん 」
「そんなこと…… 」
「じゃあ立ってごらんなさいよ。ほら、早く！ 」
「おい、やめろよ…… 」
勃起しているのは確かな事実。このまま立てばチンポと一緒に起立することとなり、恥さらし……。
「ねーみんなー！　徹がみんなの練習見て勃起してるよー！ 」
もたつく徹相手に綾子は他の女子達に声をかける。
「え…… 」

「あー、徹のえっちー！」
「うわ、高杉、やっぱりそれが目的だったんだ……」
「さいてー……」
「徹君、本当……？」
「あはは、徹ってばエッチー！」
「直美、はしたないわ。まったく貴女って子は……」
女子達は各々感想を並べながら徹の勃起に興味があるらしくぞろぞろとやって来る。
「ふーん、徹ってば……あたし達のこと見てイヤらしこと考えてたんだ……」
千夏は徹を半眼で睨み、さもがっかりしたとため息をつく。そのわざとらしい仕草から冗談なのだろうけれど、この状況で追い打ちにされると気持ちも沈む。
「なわけねーだろ……。俺は、その……トイレに行きたいだけで……」
「ふーん、ほんとかしら？　徹が本当におしっこするかどうか確かめないとね」
「な……、お前何言ってるんだよ。ふざけるな。いくらなんでも怒るぞ！」
とんでもない提案に徹も勢い任せに立ち上がり、すぐにしゃがむ。勃起しているのは事実であり、その原因は綾子のお尻の仕草に目が向かったこと。半分は彼女の言い分も当たっている事実。
保健の授業で学んだ知識しかない徹にとって勃起は迷惑な生理現象でしかない。中にはそれのおさめ方を知っている子も居るのだろうけれど、変に硬派な彼はそれを知ろうとしなかった。その結果は勃起に定期的に悩まされる日々である。
「あはは、徹、おしっこしてきなよ。我慢は身体の毒だよ」
「うっせーな。ったく、お前にはデリカシーがねーのかよ」
直美の能天気な提案はいつもならむかっぱらの立つものだが、今日ばかりは素直に従いたい。徹は前傾姿勢で立ち上がるとトイレの方に足早に行く。本当は尿意などないのだけれど、トイレにいかないことにはおさまらない情況だった……。

＊＊

体育館のトイレは普段から使用されていない。こぎれいなわりに小便の匂いがする。個室を覗くとトイレットペーパーもまばらで整備も不良。あまり使用したくなかった。
「……」
尿意の無いままチンポを出す。勃起したそれは先っぽが捲れて赤い亀頭が露出している。正直恥ずかしくて水泳の時の着替えは急いでいる。他の男子はまだ皮の被ったもので、自分のようなグロテスクさが無くて羨ましい。
「うーん……」
勃起で困ることの一つにおしっこがしづらいことがある。向かう先も勢いが良すぎて跳ねてかかるしで本当に迷惑な現象だった。

「ったく、なんで勃起なんてあるんだよ……」
「そんなの女の子とエッチするためじゃん」
「エッチと勃起がどう関係あるんだよ」
「女の子の中に入れるとき、ふにゃふにゃじゃ入らないじゃん。だから勃起しておっきく固くして……わお、徹のチンポ、でかいし剥けてる……。大人チンポ……」
「大人って……うわ！　おい、いつからお前！」
便器に向かって集中していると、直美が隣から顔を出し、チンポを見ていた。
「だって、本当に徹がおしっこしてるか確かめる～って中倉がきかないんだもん。見に来たんだよ」
「あのなあ！　ふざけるな。何考えてるんだ！　ここは男子トイレだぞ！」
「いいじゃん。徹しかいないし」
「お前がいるだろ！　お前はアホか！」
「んーん、あたしだけじゃないよ」
いつの間にかいつの間にか開いていたドアには女子数名が待機。千夏に澪に瞳に芽衣、他に麻帆が皆を止めるように引っ張っていた。
「お、おまえらな……」
「ね、徹のおちんちん、他の男子と違うでしょ？　ああいうのが剥けてるっていうの？」
「うん……。へえ、弟のと違う……」
「だね。他の男子と違うね」
澪ののんきな言葉に瞳と芽衣が頷く。彼女らの視線は徹の股間に向かっており、徹はようやく自分がズボンを直さずにいたことに気付いた。
「お、おわ！　くそ……お前らなあ……」
慌ててズボンを引っ張るも途中まで出そうになっていたおしっこがぴゅっと出る。
「うわ、さいてー！」
「きゃー、徹がおしっこしたー」
「あはは、おしっこしたいのは本当だったんだねー」
おしっこを向けられた女子は悲鳴を上げて逃げる一方、それを見に来ていたとばかりに直美はのんきなものだった。
「あー、くそ……ったく……」
慌ててズボンを下ろして今度こそトイレに向ける徹。危うくズボンに漏らすところだとホッとしていた。
「おー、おー、出てる出てる。勃起しながらでもおしっこって出るんだね」
なおも覗く直美に恥ずかしさを持ちつつも今動くと余計酷い目に遭うと大人しくおしっこに集中する。終わった後に何か文句を言いたいが、それ以上に女子達に何を言ったものかと苦悶する。

「ねえ、徹ってオナニーしないの？」
「え？　なんだよお前も綾子もオナニーオナニーって……なんだそれ？」
「知らないの？　ふーん。徹って周りに女の子多いし、なんかむらむらすること多いから知ってそうなのにね」
「むらむら？　しねーよ。そんなこと……」
「してるよ。今だって勃起してたし」
「勃起って……、そりゃ……まあ……」
「だからさ、そういう時にするんだってば。こうやってね……」
「え、おい……」
ようやくおしっこが終わったと思ったところで直美がチンポに手を伸ばす。少し冷たい柔らかい手だった。
見た目はずんぐりとした大柄で真奈と同じく巨乳な彼女。髪はぼさっとしていて整っておらず、服も他の子に比べてくたびれていることが多い。しゃべり方も男っぽくてたまに公園とかでサッカーをしていると混じっていて遜色が無い。そのせいであまり魅力的な子と映らない。
けれど唇は明るい赤色。肌は色黒だけれど水着で隠れている部分は白くて柔らかそう。身体にぴちっと張り付いたブルマはサイズが小さいのか太腿の付け根に食い込みが見える。赤い色に混じって見えるグレーのそれはおそらく……。
内側がどうなっているのかは昔、真奈と一緒にお風呂に入った時に見た。チンポが無く、割れ目があった。
チンチンを弄られたからお返しに割れ目を指ではじいたら、皮に守られた部分に当たって痛がっていたのを思い出す。
それを思い出すとだんだんチンポが固くなる。せっかく恥かしさとおしっこで小さくなったのに、また……。
「おっきくて立派だねー、徹のちんちん。おっきすぎて苦しいかもね」
「なんだよ、触るなっての……おい……」
チンポを握る手は竿をさすさすっと上下にしごきだす。チンポの先の雁首部分が引っ張られて軽く痛いけれど、それ以上にくすぐったい。
根元のしわしわの玉袋にまで触れた時、股間にぐんと力みがくる。おしっこは出しきったはずなのに、尿道からどろっと何かが滲む。先っぽを見ると、透明で生臭い汁が出ていた。
「あ、出てるね、我慢汁。ふーん、やっぱ徹って精通してるんだね。ま、こんなおっきくて皮剥けてたら当然かー」
徹の顔を見ながらけらけらと笑う直美。ぺろりと舌なめずりをする様を見ると、さらに力みと滲むモノがあった。そしてくすぐったさが心地よい。
「だから、やめろって……」

直美の指に粘液が滴り、ねちゅ、くちゅと音がする。いくらチンポの先から滲んだとはいえ、それが竿に塗りたくられるのは不快……なはずなのに、密着した感覚がさらに気持ち良さを膨らます。

「んっ……なんだ……これ……く……ぅ 」

チンポを握られたまま徹は壁に手を付き呻く。苦しいわけではないが、腰砕けになるのを感じていた。

「んふ……感じてるんだ。徹ってチビのくせにチンポばっかおっきいし、変だね 」

「う、うっせー…… 」

「あはは、感じてるから声へーん 」

股間に響く刺激に声が裏返り一オクターブ高くなる。もともと高い声質なのもあり、まるで女の子のよう。

「うふふ……声は我慢しなきゃ……。みんなに徹のエッチな声聞こえちゃうよ？ 」

「なにが……エッチな声って……ふざけんな…… 」

口だけで拒むも直美はくすくす笑うばかりで意に返さない。彼女を押し返そうと手を伸ばした。

「あん……んっ……んふ 」

すると手に柔らかい感触。それは眼鏡の運動オンチの子の水着越しの感触に比べてもずっと柔らかくて弾力があった。

「え…… 」

手の方を見ると直美のふっくらしたおっぱいをむにゅっとへこませていた。

「あ、すまん。そんなつもりじゃなくて…… 」

どきっとした瞬間、再びどろっとした汁が垂れる。それには白い濁りも見える。生卵のカラザのような白い濁り。

「んふ……いいよ。あたしも徹のチンチン触ってるし、おっぱい触られるぐらい慣れてるからねー 」

「え……お、おいおい……何を言ってるんだよ 」

普段からふざけて男子に抱き着いたりスキンシップの多い直美らしい話だが、それでも意識してしまう。

「いいじゃん。ほら、徹はオナニーオナニー……。すぐ気持ち良くなれるよ 」

ぬちゅぅり、ぬちゅり……。

直美の手がチンポを軽く握り、粘液で前後する。その刺激は徐々に甘く深く股間部に染みわたり、自然と目を瞑っていた。

「んっ……おい、やめ…… 」

もがく手は求めるように直美のおっぱいを揉む。今日はブラジャーをしているらしく、嵩張りがあるが、それでもソフトテニスのボールのように柔らかくてずっと揉んでいたくなる。

「んっ……んふぅ……徹、触り方エッチだね……んっ……んっ……なんか、あたしまで身体熱くなる……」
直美の顔からも不敵な笑いが消えて目を細める。痛いのかと思うも、彼女は鼻をフーフー言わせていた。
「直美……」
瞳は半眼でチンポを凝視しており、指で汁をねたねた弄ぶ。時折チンポの先っぽを強く撫でまわし、痛いくらいの快感を与えて来た。
それが原因なのか、おしっことは別のモノが出そうな気になる。
「やめ……直美、もう……出るから……なんか……出そうで……」
「うん、いいよ……出してよ……。徹がおしっこ出すところ見たげるから……ほーら、我慢しないでいいんだよー」
いつになく優しい声で込み上がるモノを促してくれる直美。彼女の上気した頬は珍しく、唇は粘液質な唾液で濡れている。ぺろりと舐める舌が赤くていやらしい。それを見ていると、急に彼女を抱きしめたい衝動に駆られる。
おっぱいを掴む手を肩に回すと、彼女もその意図をくみ取ってくれたのか向きなおる。
「徹……？　何してるの？　まだおしっこでないの？」
「！？」
外から千夏の声がした。ばっと身体を離す二人。行為の意味はまだ分からないけれど、直美の態度から見られたくない行為だとは理解できる。彼女は慌てて太腿に汁を擦りつけ、扉を抑えに行った。
徹もチンポを隠そうとズボンをきつめに穿き、何事もなかったかのように平静を装う。
「あ、ああ、すまんな……。さっきのことは悪かったよ。ごめんな。今掃除しようと思ってたんだけど、道具が見つからなくてだな……」
覗き込む千夏と麻帆に徹は慌てて言い繕い、何も無いアピールをしだす。
「あたしが調子に乗ってさ～、だから手伝おうっかな～って」
「そう。じゃあ、私も手伝うよ。徹君にはお世話になったし……」
「もう、おしっこ漏らすなんてあんたは幼稚園児か。そういうしょうがない子はお姉ちゃんがお世話してあげないとね……。ほら、掃除道具はこっちだから」
「おいおい、いいよ、俺の小便だし、お前らは練習してろよ」
徹は適当にバケツに水を張ると小便を強引に流す。
「きゃっ、ちょっと徹、かかるでしょー」
デッキブラシでごしごしと排水溝に水を流し込んでいた……。

＋＋

「勝負だ！　体育館の使用時間をかけて！」

「なんであんたらなんかとやらないといけないのよ。ばかばかしい」
体育館では春樹と女子部員達が揉めていた。例の勝負のリベンジを挑みに来たのだが、事情を知らない女子は困惑気味。もともと女子からの人気が無い事もあり、歓迎されていないムード。
「高尾、あんたさ、仮に勝負するにしてもなんでこっちが受けないといけないのよ。あんたらにあたし達が勝ったからってなんのメリットがあるの？」
瞳は男子相手にもひるまずに言い返す。
「こっちは先週の練習時間を徹と千夏のバドミントンの為にコート半分貸したんだ。そのおかげで俺らは思い切り練習ができなかったんだ。だから、今度は俺達が貸してもらうために勝負を挑む。悪いか！」

「うーん……、なんだかちょっと関係無いかしら……」
騒ぎを聞いて戻って来た麻帆は苦笑いしながら頬を掻く。その背後で原因の一端である千夏は顔を顰めていた。
「それに、負けた俺は雑用をさせられたんだぞ！　ふざけんな」
「千夏ちゃん、だめだよ。そんなことしちゃ……」
「そういうルールだったし」
真面目な性格の麻帆は千夏を嗜めるが、瞳、芽衣、理恵の気の強い系女子は一歩も退かない。
「そんな勝負お断りよ。ばかばかしい。時間の無駄」
「っていうか、萩さん、徹となにしてるの？　もしかしてデート？」
「へぇ、萩って徹が好きなんだ……」
「え、そうなの……」
一方で徹と千夏が二人で居たことに興味を示す芽衣と瞳。二人はからかい半分、攻撃的な視線を向けて来る。
「いやいや、別にそんなんじゃ……。っていうか、徹が公平な勝負しろってうるさいから仕方なく……。まあ、いいじゃん。別にさ。勝負してやれば実力の差もわかるでしょ？かるくやっつけちゃいましょうよ」
「負けた方は罰ゲームな！　勝った方の言うことを聞くんだ」
「ちょっと、なにそのルール」
弱小男子バレー部に負ける要素も無く強引に鼓舞するも、罰ゲームのフレーズにブレーキがかかる。
負けるつもりもないけれど、万が一ということも常にある。特に春樹は普段から女子をスケベな視線で見ていることもあり、罰ゲームが雑用のような可愛らしいことに思えないからだ。
「当然だろ。俺らはあの時負けたから、ちゃんとお前らの言うこと聞いて半分コートかしたんだ。だから、今度も負けた方が言うこと聞くんだよ」
「あたしはコート半分かしてもらっただけじゃないの。なにその後付」
「ふーん。じゃあ、あんた達が負けたら言うこと聞くのよね？　コート半分なんて生易しいモノじゃなく……さ？」
すると今まで黙っていた綾子が口を挟む。幽霊部員のわりにこういう時だけは聞き耳を立てており、練習以上に積極的に参加してきた。
噂によれば鬼瓦アイアンズやスイミングスクールにも参加しているらしく、やはりどれも幽霊部員。誰と仲良くするわけでもなく、むしろどこでも浮いてしまい、むしろ嫌われることの方が多かった。
「今度も勝負して勝てばいいじゃない。簡単でしょ？」
「ちょっと何勝手に決めてるのよ。私はそんなアホで理不尽な勝負、受けないわ。うん、

もういい時間だし、今日は早引けさせてもらうわ 」
承諾の流れに持って行こうとする綾子を見て理恵はいつになく早口で捲し立てる。普段なら強気かつ知的な雰囲気を維持しようとする彼女だが、今日はいつになく不機嫌をあらわにしていた。
「え？ 帰っちゃうの？ いいじゃん、高尾と勝負してあげれば 」
「直美、帰るわよ。雨ふりそうだし、貴女、傘ないでしょ？ 」
「あー、それは困るかも。まったく我儘リエビタンAなんだから 」
「？ そのリエビタンってなにかしら？ 」
「ん？ えーと、理恵のニックネーム？ 皆言ってるからそうなのかなーって思って 」
「ふーん……。知らないわね…… 」
首を傾げる理恵と、それを見てクスクス笑う瞳と芽衣。ニックネームの出どころは彼女たちであり、元ネタは栄養ドリンク。DからAに変更された理由は……。
「とにかく、私は帰るから、勝負したいならすればいいわ。でも、私は関係無いから巻き込まないでね 」
「うん、お疲れ様…… 」
一度決めたら強情な理恵を止めようとする子もいない。ただ、最近よく早引けをする。特に綾子が来るときは妙に険悪な態度を見せており、何かというと理由を付けて帰ってしまうのだ。
「待ってよー、りえ～ 」
ぱたぱたと後を追う直美を見てほっと一息つく千夏達。
気の強い女子が三人も居る中にさらに面倒な性格の綾子が居る。それだけで既存の部員は気疲れすることが多く、結果的には帰ってくれるほうがありがたかった。
「……あたしも嫌かな。っていうか、千夏が約束したんでしょ？ じゃあ他の部員関係ないじゃん。徹と二人でやればいいじゃん 」
「あーいいね。ちびっこ同士お似合いじゃん？ っていうか、ウチら巻き込まないでよね 」
「ごめん…… 」
芽衣達の言うことも一理あり、千夏は珍しく頭を下げる。こうなったのも彼女の軽はずみが原因であり、罪悪感があったからだ。
「うーん、いいんじゃない？ 勝負してあげようよ。うちらも練習試合のつもりでさ 」
「うん。高尾君達も練習になると思うよ。じゃあ、一セットだけでいいかな？ そろそろ暗くなるし…… 」
暗い雰囲気の嫌いな澪は麻帆の背中を叩いて言うと、彼女も現状を打破するために頷く。
「なら、次の土曜日に勝負だ！ 今度は前みたいに行かないからな 」
「ふふ、返り討ちにしてあげるんだから 」
「そっちのメンバーは萩と遠藤と菅井に中倉か。あと誰だ？ 」

「私はパス。雑魚相手にメンドイ 」
「瞳がやらないなら私もやーらない 」
瞳と芽衣は背を向けると荷物を取りに行く。外ではそろそろ雨が降り始め、ぽ つぽ つと雨音が屋根を叩く。
「ごめん、あたし達、その日はサッカー部の試合の応援行くから無理 」
美優は佳代に「ねー 」と同意を求めていたが、彼女のほうはピンと来ていない様子。おそらくは無理やり佳代を付き合わせるためだろう。
「私もその日は徳夫君と一緒に拓馬君の応援の約束があるの 」
翼も幼馴染を応援すべく参加ができない。
「いいよいいよ、大丈夫大丈夫。この前だ って徹と二人でコテンパにしてや ったし。大船に乗 ったつもりで任せてよ 」
「ほー、いいんだな？ 」
「当たり前！ あんたらこそ、何を命令されるか、せいぜい肝を冷やしておきなさいよね 」
有力なメンバーが不参加だが、相手は弱小男子バレー部。千夏は春樹を侮り、売り言葉に買い言葉の軽い気持ちで勝負を受けた。
「絶対だぞ！ じゃーな！ 」
約束を取り付けるなり背中を向ける春樹の表情は誰にも見えないが、その背後で嗤う誰かのことも気付かれない……。